



ノベル付CG17枚+
文字無差分16枚入り!

PDF
同梱

ムッチムチの大地! 土女の母性!

ふたなりショートノベルCG集

ムツチムツチの大地♡

土女の母性♡

「たったいま〜って」

午後6時、今日は定時に仕事が終わわり
久々に早めの帰宅をすることができたオしは
リビングへ続くドアを開いた。

「あらっ、おかえりなさい、お前君。
すくお夕食の用意をしますね。」

「えっ？あのお〜……」

そこには色黒でムツチムツチのヤラシイ着物姿の女がいた。

「あら、やだ。私ったら自己紹介がまだでしたわね。
いつも妹たちがお世話になっていきます、
土女の美土緑と申します。」

「妹たちが……美冷さん達のお姉さんですか〜」

「はい。妹たちは少し重い物に出かけていまして、留守を頼まりましたの。」

美冷さん達のお姉さんがこんなほわっとした

色黒ムツチエロお姉さんだったとは……あ、いかん、あんなエッチな
体を見てたらチンポが勃起してきた。何とかごまかさんと……

「あら、お前君どうなされたの？」

「いや、ちょっと仕事で疲れたのか体の調子が……」

「まあ、大変〜（こちらで少し横になって〜）」

その場で正座をする美土緑さん。オしは促されるまま彼女の膝枕の上に頭を置いた。

「（うついていれば少しは楽になるかと思えますわ。」

ムツチムツチの柔らかい太ももだった。ああ……癒される。

ふと、彼女の股間が目に入った。そこには美冷さん達と

同じくかわいらしいモノがあった……

土女の美土緑

みど

「……あの、美土緑さんこれって……」

「あら、見つかってしまいましたわね。妹たちと同じく私も生えていますのよ♡
そういってしオタードの横からチンポを取り出す美土緑さん。

「おっ……おおっ……すごい……美土緑さんのポリウムある体のせいか、
小さいおちんちんに見えてすごくかわいいですね……♡」

「んふふっ……舐めてみますかっ少し楽になるかもしれないませんわよ♡
少し照れ臭そうに美土緑さんは言った。

「は、はい……いただきます♡」

オしは目の前にある美土緑さんのおちんちんをはぶっとほおばった。



「んっ…んっ…美味しい、すごく美味しいですよ、美土緑さん♡」

「ふふっ…少し汗ばんでるので臭わないかしらっ」

「この臭いがいいんですよ、はむ…♡」


オしは彼女のチンポを一心不乱にほおばっていた。

「そんなに一生懸命ほおばって、お前君はかわいいですねえ♡」

「なんかこうして膝枕してもらってしゃぶってると」

甘えなくなっちゃう…ママあ♡♡」

「うふふっ…らっばい甘えていいんですよ、お前ちゃん♡」




「あむっ…んっ…はあ…美土緑ママのおちんちんガチガチだよ♡」
「んっ…そんなにおちんちんユツチュサれたらおチンポミルクでちゃいそう…♡」
「んう…♡美土緑ママのおチンポミルク、ちょうだい…♡」
「あん…ダメ…あっ…ああっ…♡」
びゅっ…びゅっ…
お淑やかな美土緑さんのように、精液は上品に亀頭から発射された。



「はああ…♥はしたないおチンポミルウいっばいでちゃいました♥
お前ちゃん、美味しかったかしら?」
「うん、すごく美味しかったでしゅ♥次はおっぱいちょーだい♥」
「んふふっ、ホント甘えんぼさんねえ♥」


「あぁっ、じゅわんじゅわん♡ママのおちんちんカチカチだし、
おっぱいはすっごく柔らかくておいちい♡」
「あんっ…♡おまえちゃんもおちんちんカッチカチだね♡」
「だってえ、ママのおっぱいもおちんちんも
すっごくエッチなんだもん♡」
ぞうらってオしはテロテロと美土緑さんのおっぱいを舐めまわした。
「んふふっ…♡かわいい…♡」



「あっ……ああっ……♡ママあ……おちんちんからなんかでちゃらぞう……♡」
「んっ……♡いいわよ、いっぱい出して♡」
ママとおチンポミルり掛け合いらっしやまじょ♡」
その言葉でオシの手の動きは早くなった。
「ニチュニチュと音を立ててチンポ同士が絡みあった。
「あっ……♡もうダメ♡ああああああああっ!!」
「あんっ……♡お前ちゃん……ああっ♡お、おっぱいもイッちゃっ♡」
ぶっ!!びゅるっ!!びゅるるっ!!ぶびゅーっ!!
チンポから精液が発射されると同時に、
美土緑さんの乳首からは大量の母乳が噴出した。



「はっ…はあっ…あっ…ごめんね、
お顔にいつばいかかっちゃったわね♥」
「ん〜♥ママのおっぱいミルクもおチンポミルクも
すごくエッチだから大好きだよ、ポク♥」
「んふふっ、そう♥お前ちゃんもミルクいっぱい出たね♥」
「うん♥ママのチンポすごく気持ちよかった♥」
美土緑ママのキンタマにぶっかかった精液は、
とろりとキンタマを伝っていた。



仰向けに、足を広げて寝かせられていた。
まるでオムツを穿えられる赤ちゃんのようだった。
「やあ、いっぱいおもらししちゃったからキレキレイキレイしまじようねえ」❤️


ぞうらうつと美土緑さんはオシのチンポに
自身のチンポを擦り付け、奥合わせしてきた。
「あんっ❤️こんな態勢でチンポ擦り付けられるなんて恥ずかしらでっせ」❤️
「ふふっ、恥ずかしくないですよ〜❤️」
「おちんちんキレイキレイするだけですからねえ」❤️

擦り合わせているうちに二人のチンポからはガマン汁があふれだしてきただ。
それが絡み合い、ニチュニチュとヤラシイ音をだして
二人のチンポを絡み合わせていた。

「あっ、あっ♡ママあ、なんかおちんちんから出てきてるよ♡♡♡」
「ふふっ、これはおちんちんをきれいにする石鹸よ♡♡ほら、あ、おっはっはっ」
「あっ、すっごいね♡なんかすっごく気持ちいいし♡♡♡」
「んふふっ、ママもすっごく気持ちいいわよ♡♡」
二人のガマン汁でチンポはテッカテカに光沢を放っていた。

「はっ、はあ、はあ♥♥ママおっぱいからもなんかが出ちゃってたよ♥♥」
「やだ、恥ずかしい。女の人のはあ、おっぱいからも(っ)っやっつて
おもらししちゃうことあるのよ♥♥」

「へ、へ、へ♥♥すっぴんおら〜」
「おっぱいも、そね(っ)してもキレイにしたのにまた汚れちゃったわね。
もう一回キレイキレイしましょうね♥♥」
そういって美土緑ママは二人の精液で汚れたチンポを
再び擦り合わせるのだった。



オしは今美土緑ママに抱っこされてた。俗に言う逆駅弁状態だった。
又チチッ……♡
音を立てて美土緑ママのチンポがオしのケツマンコに入って来た。
「んああああっ……♡マ、ママのチンポがボウのケツマンコにいい……♡」
「んふふっ……♡入っちゃったわね♡痛くないかしらっ？」
「み、美冷ちゃんや、炎美ちゃんにいつも入れられてるから……♡」
「あらあら、はしたない子たちね。ふふっ、でもいい締めまりね♡」
ぞうらっつと美土緑ママはゆっくりと体を上下に揺らし始めた。

ズツズツ!!

上下運動は激しさを増していた。オシのケツマンコからは腸液と美土緑ママのガマン汁が合わさった汁がとろりと垂れてきていた。

二つの液により、ケツマンコからはヌチヌチとヤラシイ音が出ていた。

「んあっ♡あああっ♡ママあ♡ケツマンコ気持ちいいよあ♡」

「ママもよ♡ママもおちんちん気持ちいい♡」

大好きなお前ちゃんもチユツチユしながらお尻できて気持ちいいわ♡」

チユツチユと絡み合う二人の舌。互いの下を求めあい、チンポはさらに勃起していった。



「んっ♡んっ♡イクよ、お前ちゃん♡
お前ちゃんのケツマンコの中にママの精子出しちゃうよ♡」
「あっ♡あっ♡出してえ♡ママのチンポ汁出して
ボクのケツマンコ妊娠させて弟作ってえ♡」
「いいわよ♡ママの濃い精子で赤ちゃん作っちゃうおうね♡あっ…イクっ…あああっ…♡」
「ぶっ!!びゅる!!びゅる!!ぶっぶぶぶゅっ!!
んああああっ♡」
大量の精液がオシの腸内を駆け巡った。

「はああ♥よく頑張ったねえ、えらいわよ、お前ちゃん♥」
「うん、ホウ頑張ったよ♥ママのチンポ汁いっぱい受け取ったよ♥」
「んふふっ♥ヤラシイ汁がいっぱいケツマンコから溢れちゃったね♥」
「うん…♥」
「おーい、お二人さんもうよいかの?」
「余韻に浸る二人に声をかける者がいた。」
「げっ!?え、炎美さん!?!」
「美雷達もいるよ〜♥」

「み、みんな帰ってたのかよ…?!いつから!?!」
「うるたえるオしに美冷さんが口を開いた。」
「膝枕でイチヤイチヤしたあたりからおったぞ」
「ほぼ、はじめっからじゃないですか!?!」
「ケラケラ、それにしてもお前殿は赤子ぶれいが好みだったとは」
「かわいかったよ♥美土緑ママあ〜っ♥」
「ふ、不覚…!これは一生いじられるパターンだ!!なんてことだ。」
「うふふっ、お前ちゃん、大丈夫よ。ママも一緒についてあげるから、
お姉ちゃんたちにいじめられたらママのとこへっらっらっ♥」
「ま、ママあッ!!」

「あー!姉上ずるい!!」
「新しい住人が増え、にぎやかさが増すのだった。」
ムッチムチの大地ノ土女の母性ノ完

































